

コロナ禍における 授業実践の振り返り

桑原千明

文教大学教育学部准教授

新型コロナウイルス感染症の流行により、人々の生活は大きな変化を余儀なくされた。それは大学教育においても例外ではなく、オンライン授業が主流となるなど教育方法を中心として急激な変化を経験することとなった。個人の授業実践としても、2020年度は挑戦の年となり、その挑戦は2021年度に入ってなお続いている。本稿では2020年度を中心に現在までの自身の授業実践を振り返ることとする。

1 2020年度の取り組み

2020年度、私の所属大学における授業は、多くの大学と同様に、授業開始時期を遅らせて全面オンライン授業(オンデマンド型中心)での実施となった。私にとって

オンライン授業の実施は初めての経験であり、2020年度はオンライン授業の特徴やツール・方法、教員に求められる事柄についての情報収集からスタートした。その中で、 \gg 学習者の状況(学習環境・学習量など)、 \gg 学習目標の明確化と課題設定、 \gg 相互作用の難しさなどを考慮することの重要性を確認し、私は①授業の特徴を考える、②学生の取り組みのペースを考える、③相互作用の方法を考えるとという3点に特に注力して授業実践に取り組むこととした。

まず①授業の特徴を考えるについては、担当する授業の特徴(受講生・到達目標・内容など)やカリキュラム上の位置づけの整理を例年よりも丁寧に行い、その上で授業ごとに資料の提供方法(動画資料・文字資料など)や課題内容の検討を行った。

次に②学生の取り組みのペースを考えるについては、自分が担当する授業だけでなく、学生がどのように授業に取り組んでいるのかを予測し、学期全体の見通しと各授業の見通しをもてるようにするための取り組みを行った。具体的な取り組みの1つとしては、資料提供を極力同じ曜日の同じ時間に行い、課題提出の締め切りは全ての回

を当該授業の時間割時間内の同じ時間に設定した。このような取り組みを行った結果、受講学生から「授業資料が出てくるのがほしい」や「課題の提出時間が見に行こう」と決めることができた」や「課題の提出時間がいつも同じで、自分の予定を立てやすかった」などのコメントが寄せられ、基本的な取り組みではあるものの、学生の学習ペースを組み立てる際の一助となったのではないかと考える。学生の状況については、お互いに経験のない状況であるため予想することが難しかったが、学生のコメントからだけでなく、所属する大学や他大学が実施していた学生状況アンケートなどの結果からも、非常に有益な情報をも得ることができた。

最後に③相互作用の方法を考えるについては、第1に「教員―学生間」の相互作用を目指し、当該授業の時間割時間内にリアルタイムで相談や質問ができる時間を設定することと、フィードバック資料を充実させることに取り組んだ。前者については利用する学生はごく一部に限られていた。後者については課題への学生の回答や授業の感想、質問への回答を盛り込んだ資料を作成した。資料作成に長い時間はかかったものの、学生からは多くの質問や感想

が寄せられるようになり、学生の授業に対する積極的な取り組みを窺い知ることができた。第2に「学生―学生間」の相互作用を目指し、フィードバック資料の作成（先述の通り）と共同して行う課題の設定に取り組んだ。共同して行う課題は、リアルタイム実施が可能な授業についてはグループに分かれてディスカッションを行う機会を設け、リアルタイム実施が難しい授業については紙面を通して相互作用ができるように設定した。例えば2〜4年生が受講していた授業においては、カリキュラムにはすでに基礎的な学びを終え、より実践的な思考力をつけることを狙いとした授業であったため、はじめに個人での事例検討を求め、その検討結果をグループごとに紙面上で共有し、さらに事例の再検討を求めた。最後に再検討を行った課題を全体で共有し、その上で個人の考えの記述を求めた。紙面を媒介とした間接的な相互作用にとどまったものの、学生からは「オンデマンドでありながらいつもの授業のように意見交換ができた」など概ねポジティブなコメントが寄せられていた。

学生からの感想・意見を積極的に求めたことで、注力した取り組みの効果と課題を知ることができたと考える。

2 現在までの取り組みから見えてきた課題

2021年度に入り、オンライン授業とキャンパスにおける対面授業が混在したハイブリッド型授業が展開されるようになった。オンライン授業については2020年同様の取り組みを続け、対面授業についてはソーシャルディスタンスを意識しながらのグループワークやディスカッションという変更もありながらも2020年度以前と同様の実践を行っている。現在までの取り組みを振り返り、課題は山積ではあるものの、特に自身で取り組みたいと考えている大きな課題として以下の4点を挙げる。

まず1点目が教育効果の大きい教育方法の検討である。授業の特徴や学生の状況を考慮し、授業ごとに実践方法を選択してはいたものの、対面授業で行っていた例年と比べて理解度や習得度に差があるように感じられた。特に演習を伴う授業をオンライン形式で実践する場合、どのように実践することが教育効果の増大につながるのかを検討する必要がある。2点目は学生の学習ペースと教授内容量のバランスの検討である。オンライン授業においては見通しを共有することや資料提供・課題提出のペースを一定にすることなどを実践してきたが、ハイブリッド型授業となったこと

で、教員・学生ともにスケジュールの管理が複雑になったと考えられる。実際に学生から学習ペースの掴みにくさに困っているという相談を受けることもある。どの程度の量をどのような方法で提供することが、学生にとって学習ペースを構築しやすく、安心した環境の中で学ぶことができるのかを考えたい。そして3点目はより効果的な相互作用方法の検討である。教員―学生間、学生―学生間の相互作用を目指した取り組みの結果、一定の効果が期待できる方法(フィードバック資料の充実や課題設定の工夫等)と期待される効果が小さい方法(授業時間内のリアルタイム質問時間の設定等)が明らかとなった。学生は相互作用を通して学ぶことも少なくないと考えられるため、より効果的な相互作用の方法を取り入れた実践を目指す必要がある。最後に4点目は所属する学部特有の課題でもあるが、学期中に実習が実施される場合の授業づくりとその展開の検討である。2020年度はオンライン授業中心ということもあり、学期中に実習が実施される場合には全ての回の授業内容を1回目で提供し、相互作用のある課題も含めて余裕をもった課題提出締め切りの設定を行うという取り組みを行った。この取り組みに対して、学生からは肯定的

な意見と否定的な意見が寄せられていることや、ハイブリッド型授業ではこの取り組みの実践が難しいことなどから、より取り組みやすく効果的な方法を考えたい。

3 取り組みの振り返りからの気づき

以上のように私の拙い授業実践を振り返ってみると、2020年度は確かに挑戦の年ではあったものの、新しいことへの挑戦ばかりではなかった。新型コロナウイルス感染症流行という未曾有の危機ではあったが、個人の授業実践においては一度立ち止まってこれまでの授業実践を振り返り、整理できたことが大きな意味をもっていた。その結果、これまでの実践をより丁寧に行う必要性に気づくことができた。その一例として、学生の声に耳を傾けることの重要性を再確認したことで、より丁寧に学生の授業方法・授業内容に対する考えを聴くように心がけることができた。学生が安心して学べる環境を提供することで、主体的で深い学びにつながると考えられる。

さらに、挑戦の中での意義深い経験として、所属する大学内外を問わず教員間で授業実践について話をする機会が多くもてたことも挙げられる。特に所属する大学内の

FDにおいて自身の授業実践について発表する機会を得たことは貴重な経験であった。自身の実践を他教員に伝える際には、正直評価に対する不安が大きかった。しかし自身の取り組みを伝えることや、教員間で情報を交換することで、他教員の考えや実践に触れ、刺激を受けるだけでなく、自らの授業実践の課題やヒントを発見する機会となり、その後の授業実践において大きな助けとなった。

このように、立ち止まって自身の実践を再検討することの重要性と不安を恐れず他者からの評価を積極的に得ることの重要性は、当たり前前のことを当たり前に行うという挑戦を通して得られた気づきである。

ポストコロナに向けて、オンライン授業とキャンパスにおける対面授業のように、学びの選択肢が増えたことは学生にとっても、教員にとっても歓迎すべきことであろう。より効果的な教育を目指すために、それぞれの方法のメリットとデメリットを整理し、より効果的な方法を選択することが必要である。その際には各大学でシステムの整備や授業実践の蓄積、学生アンケートの活用などが求められるであろう。個人としては、挑戦を通して得られた気づきを活かし、今後の授業実践に尽力する所存である。

武蔵野大学アントレプレナーシップ学部 ・ 伊藤 羊一「武蔵野大学アントレプレナーシップ学部学部長」

「社会を創る」学部を通じて日本を再び元気にする

はじめに

2021年4月、武蔵野大学はアントレプレナーシップ学部（武蔵野EMC）を開設、73名の1期生を受け入れて新しいチャレンジを開始した。

私たちはアントレプレナーシップ（起業家精神）を、「高い志と倫理観に基づき、失敗を恐れず踏み出し、新たな価値を創造していくマインド」と定義している。そのようなマインドを持った学生を育成しようと、日本で初めて、アントレプレナーシップの名前を冠する学部をつくった。

私たちが目指すものは、「自分の思考と行動で、世界をより良い場所にできると本気で信じる人を増やす」こと。

それには社会に対する働きかけが不可欠だ。そのため私たちは、以下の特徴を学部を持たせた。

1 実践中心のカリキュラム

当学部には専門となる特定の学問分野があるわけではない。「社会に新たな価値を提供していく」という理想を実現するためにどうやって人材を育成するか、と逆算で教育カリキュラムを一から考えていった。結果、自分たちが追求したいと考えるビジネステーマを、失敗を恐れず踏み出し、実践してみることから得る学びが大事だと考え、3年次には全員が起業を行うことを目指し「実践」を中心に据えた。

ただし当然、ビジネスを成功に導く力は、実践するだけでつくわけではない。マインド、すなわち「高い志と倫理観」を鍛えると同時に、想いを形にするために、クリエイティブなスキル、マーケティング、マーケティング、アカウントティングといったスキルを身につけることが大事であり、こうしたマインドやスキルも、アクティブラーニングスタイルをとりながら鍛えるカリキュラム構成とした。

2 教員のほとんどが現役実務家

「社会に対する働きかけを行う」といっても、変化が激しい現代社会では、すぐに人が持つ知識やスキルは陳腐化する。社会において旬となる知識やスキルをアップデートし続けるためには、社会の最前線で現役で活動している人間が教えることが重要と考え、ほとんどが現役実務家教員という、大学では類を見ない独特の教員構成となった。起業家、NPO代表、ベンチャーキャピタリスト、外資系IT企業日本代表、マーケター、企業内大学責任者など、ビジネスパーソンとして今を生きる人間が、社会の最前線をキャンパスに展開する。

3 1年次は全員、寮で共に学ぶ

高校から大学、大学から社会人と、人は徐々に社会との関わり合いを増やしていく。高校生にとっては、主に家庭と高校内での人間関係が中心となる。そこから大学に進学し、大学生活で社会との関わり合いを学んでいくことが、その後の社会人生活に重要である。

そこで、様々なバックグラウンドや価値観を持つ1年生が全員入寮して共同生活をする中で、「社会のような場所」をつくり、そこに教員やゲストも参加しながら、そのベースキャンプで自分が何を考え、どう人との距離感を捉え、どう踏み出していくか、ということを考えてもらう。おう、と思いついた。学部長である私も、毎日寮で学生たちと生活をともにしながら、学生たちの成長を見守っているが、寮の「圧縮された人間関係」に戸惑いながらも、一人ひとり、自分はどのように生きていくのか考え、踏み出し、少しずつ社会との関わり合いを作ってきている。

以上、私たち武蔵野EMCのチャレンジを紹介してきた

が、これをアントレプレナーシップの発達段階で表現すると、スタートは“Lead the Self”、すなわち、自分で自分の人生をリードする、自分の興味関心に従って突き進む、ということに尽きる。

私たちは、人からの教えや、人との対話や、様々な経験により成長していく。しかし、受動的に何かを受け取るだけでは、新しい価値を生み出すことは難しい。なぜなら、新しい価値とは、主体的な意思の結晶だからだ。

だから、まずは自分自身をリードして、自分の人生を踏み出し、歩いていくことが何より重要なことと考える。その先に、主体的に何かを作り出そうという意思が生まれ、だからこそ失敗を恐れず踏み出していくのだ、と考える。

とはいえ、新しい価値を生み出していくのは、一人では難しい。仲間同士で、自分たちの得意分野を掛け合わせながら取り組んだ方がより大きな価値が出せる。そしてそれがチームになっていく。そうすると、Lead the Selfなれたリーダーは、人を巻き込み、導いていくことになる。“Lead the People”のプロセスが生まれる。

その結果、高い志と倫理観に基づきチームが行動していくことで、社会に価値が生まれていく、すなわち“Lead

the Society”となっていく。

つまり、アントレプレナーシップは、“Lead the Self”から生まれ、“Lead the People”を通じて、“Lead the Society”につながる。こうしたプロセスを、教育を通じて経験し、社会に価値を提供する起業家を育成していきたい、と考えている。これが必ず、今の停滞した日本に元気を与えることにつながると、私たちは本気で考えている。

この学部を構想した背景として、私の個人的な経験を述べておくこととしたい。

私は、1990年に大学を卒業して、企業に就職した。大学生活は家庭とアルバイトと、ごく限られた友人関係の中で完結していた。勉強にも力を入れなかった。結果として社会で生きていく準備が全くできず、そのまま何も考えずに、就職人気ランキング上位の会社に入るべく就職活動を行っていった。結果、面接がたまたまうまくいき、当時、2大格付機関からトリプルAを得ていた、つまり「6A」だった世界で2社のうちの1社であった銀行に就職することができた。

しかし、「就職に成功」しても、それはゴールではなく、社会人生活のスタートにすぎない。自分の志も何もなく、

金融の仕事をしたいわけでもない中で就職し、職場も楽しくも感じられなかった私は、入ってすぐメンタルを病み始め、遂には一時期、会社に出ることができない状態に陥った。

そのように、20代までは完全に受動的な生き方をしてきた私も、たまたまいい仲間といい仕事にめぐりあったことが転機となり、時間をかけて様々な経験を積み重ねることで、“Lead the Self”、自らの志と倫理観に目覚め、そこから“Lead the People”、そして“Lead the Society”を意識した生き方、働き方ができるようになってきた。

これは私の個人的な経験ではあるが、似たような経験を持つ人は多くいる。現在、私は武蔵野EMCの学部長をしながら、Zホールディングス株式会社の企業内大学である「Zアカデミア」の学長や、グロービス経営大学院の客員教授を兼務しているが、そうして悩む多くの社会人を見るにつけ、大学生の頃からLead the Selfを追求していけば、そのもやもやのほとんどは解消するのではないかと、と確信している。

そのチャレンジは、私たちのみならず、日本にとっても、

重要な課題と考える。

私たちが住む日本は、今後、何を強みとし、何を目指していくか、国全体として迷走しているように感じられる。工業化時代には世界をリードしたものの、IT、インターネット時代にはJapan as No.1と呼ばれていた頃の輝きは失われ、世界の時価総額ランキングでトップ30に1社も入らなくなってしまった。そしてその後のAI・データ時代においても、日本は米国、中国ほか、AI先進国に後れをとっているのが現状だ。

しかし、私はこの国の人々が持つ潜在的な力を信じている。会社の言うことに従うだけではなく、自分の意思に従って新しい価値を生み出すために果敢に踏み出していく人が増えれば増えるほど、日本は活性化することができる。

そこで私たちが行うべきは、一人ひとりがLead the Selfされ、高い志と倫理観に基づき、失敗を恐れず踏み出し、新たな価値を創造していく人材を多数、輩出していくことだ。そうした人材が各所でリーダーシップをとり、日本が経済的に再生していくプロセスに、大学教育を通じて、貢献していきたい。